

心奥探訪

心巡りその10 く言の葉く

新しく歩む彼女に様々な出逢いが訪れる。

それは新しい門出を祝う神様からの贈り物なのか。

それとも目を背けたくなるような過去と向き合った結果なのか。

過去が終わり未来へ歩み出す、そんな境はざまの物語。

お互いに目的がわからない状態での出会い。

紹介を通じて知り合ったその人はどんな人なのか？

事前情報など入れずに話して見たかったという。

「その目線で見えてくれるんだ。」

これまで彼女の境遇を聞いた人は、共感してくれる人、

わかるうとしてくれる人など様々だったという。

けれど目の前のその人はそのどちらでもなかった。

『どうでもいいんですよ。』そう言っただけのける姿に好感を抱いたという。

この人ならフラットな目線で私を見てくれるかもしれない、

その感覚で私の言葉を言語化してくれることに価値がある。

そんなふうに感じると同時に、自分の話をどう受け取り、

どう表現してくれるのか知りたかった。

インタビューが始まる。

聞いて欲しいという気持ちが少ないと語る彼女はこれまでも自身の境遇を話した際、

『わかる』と言われた時の悲しさを感じていた。

それは相手に対してではなく「わかるわけない」と感じてしまう自分が嫌だった。

思うたびにわかるうとしてくれている人を否定するような、そんな自分を嫌いになった。

話すことも少なくなり、聞いてほしいも失せていく。

相手の言葉の枠に自身が寄せていくことも多く、

話を聞いてもらってたはずがいつの間にか自分が聞き役になっていることも少なくなかったという。

だからこそ言葉そのままを受け取る姿勢に、それを自身の世界観に落とし込むセンスに、

初めて自分ではない人に任せてみたいと感じ、その人の角度から自分を知ってみたかった。

「毎日が楽しみで」

インタビューは長い時間で4時間を超えることもある。

自分自身についてそれほどまでに時間をかけて話すことは初めてだったという。

ありきたりな質問の応酬ではなく、深い部分やデリケートな部分にも入っていく。

それでも自分の想いを汲み取って言葉にしてくれることが楽しかった。

話が逸れて違う話題を話していると認識している時も相手は話を遮らない、止めない。

だから彼女は止められるまで喋ろうと笑顔で語る。

「良い意味で暴走できる感覚。」

そこには相手に対しての信頼があり、委ねられる存在であるという。

暴走の果てに出てきた何気ない一言や一見関係のないようなエピソード、

そこに大きな発見があったり、話したい状態で紡ぎ出す旬な言葉。

それを大切にしている人であると理解しているからできる自由な時間はとても貴重だと語る。

「作品を作るという目的がある中で、ここまで自由にできる空間を創れる人を私は知らない。」

インタビュー時の動画を見返しこんなにも自由に喋ってるんだと感じることもあるという。

作品という枠なき枠に落とし込む中でそれを感じさせない話し方、投げかけ方はセンスだと彼女は言う。

そして出来上がった作品を見て、美しいと彼女は語る。

一つ一つの言葉に込められた想い、小さな小さなニュアンスの違い。

それはこれまでの自分というものを初めて形として成してくれたものであり、余計なものを省くということの大切さを知るきっかけになった。

彼女にとってこの作品は

この心奥探訪しんおくたんぱつは何なのか？

「私です」

まだまだ始まったばかりで今はまだ量はないけれど、

それでもこの先自分というものが描かれ続けた時。

それはきっと私になる、それを後世に残していきたい。

彼女の生きた軌跡がまた一つ増えていく。